

市内の高等学校に対するインタビュー調査（6校）結果まとめ

1. 調査概要

神戸市外国語大学（以下、「神戸市外大」という）の今後のあり方を検討するに当たり、地元高校生の進学ニーズ等を把握するため、市内高校6校の進路指導担当教員等を対象にインタビュー調査を実施した。本資料では、専攻分野の選択の傾向、グローバルな学びを志望する生徒の大学選択に対する志向、神戸市外大に対する認知、今後の改善・強化すべき点等について、共通する傾向と主な意見を整理した。

2. 論点別まとめ

（1）高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・各校とも、生徒の進学先の選択にあたっては、大学名そのものよりも「大学で何を学びたいか」「将来どのような分野に関わりたいか」を重視し、進路指導やキャリア教育を実施しているとの意見が共通してみられた。
- ・一方で、高校生の段階では、将来の進路が明確でない生徒も多く、これらの生徒は進路の幅を持ちやすい分野を選ぶ傾向があるとの意見が多くみられた。具体的には、理系では比較的特定分野の志向が明確であるが、文系では幅広い学びを求める傾向（経済・経営・商学部系統の志望が高い）があるという見方が示された。
- ・実際の受験を意識した段階においては、受験科目、出願方式が現実的条件として、判断材料となっているとの意見が多くみられた。
- ・グローバルに関連するコースや教育課程を有する高校では、外国語・国際関係などの専攻を志望する生徒が多いものの、必ずしもそれらの分野を志望するとは限らず、語学をツールとして捉え、経済、経営、法学など他分野への進学を志望するケースもあるとの意見も複数の高校でみられた。

（2）グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・グローバルな学びを志望する生徒が重視する点としては、海外留学や国際交流の機会（以下、単に「留学」という。）及び支援制度、多文化・多国籍の学習環境、英語等で授業を履修できる環境であるとの認識が多くの学校で共通していた。
- ・特に各校とも、留学生や外国人教員との交流など、日常的にグローバルな環境に触れる機会が、大きな魅力になると受け止めている。また、オールイングリッシュ¹の授業やダブルディグリー・プログラム²などの特色ある大学への進学希望が高まっているとの意見もみられた。

¹ 日本語を一切使用せず、授業中の教師及び生徒による発話やコミュニケーションから言語活動まですべてを英語で行う授業の方針。

² 在籍する大学と海外の協定校の両方で学び、所定の単位を満たすことで、双方の大学から同時に2つの学位を取得できる制度。

- ・なお、留学制度の充実については、大きな魅力としての受け止めがある一方で、経済的負担の大きさから、留学必須のカリキュラムの大学を敬遠する生徒や、留学の影響により4年を超えて大学に在籍することに抵抗感を示す生徒も存在することが複数校から指摘された。この点、交換留学枠の拡充をはじめ留学サポートの充実を図り、一部トップ層の学生だけでなく、ボリュームゾーンの学生が留学に挑戦しやすい環境の整備ができれば、大学としての魅力が増大するのではないかと意見があった。
- ・また、近年の傾向として、単に語学を学ぶこと自体よりも、「語学を活用して何を学ぶか」「国際分野と関連する複数領域に触れられる」ことが重視されている。語学はあくまでツールとして捉える傾向は強まっているとの認識は各校共通しており、「語学よりもうひとつ付加価値が必要」との認識も示された。

(3) 神戸市外大の強みとして認識されている点

- ・神戸市外大の強みとしては、公立大学（学費負担の少なさ）であることが複数校で評価されたほか、小規模大学ならではの少人数教育、教員との距離の近さ、手厚い学びを挙げる高校もあった。また、一定の学力水準、外国語系・国際系志望層における知名度の高さ、自宅から通学可能であることも、魅力として示された。
- ・教育内容面では、国際関係学科があること（国際関係学を学びたい生徒は多い）、模擬国連³や語劇祭⁴などの特色ある教育活動のほか、英語等で授業を履修できる環境、留学の機会や支援制度について言及がなされた。特に、専門性の高さから、「国際関係分野や外交・国際機関への関心を持つ生徒」「語学の教員を目指す生徒」「語学スキルを磨きたい生徒」には、訴求力があるのではないかと意見もあった。
- ・一方で、これらの強みは、学校によって認知のされ方に差があり、必ずしもインタビュー調査対象の高校全体に十分浸透しているわけではない（次項で詳述）。また、多文化・多国籍の学習環境（留学生・外国人教員比率）については、神戸市外大の強みとして挙げる高校もあったが、その実態までは十分認知されておらず、外国語大学としての印象に依拠して評価されている面もうかがえた。

(4) 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・最も共通している課題は、「どのような内容が学べるのかが具体的にイメージしにくい」「卒業後どのような分野で活躍しているかイメージしにくい」という点である。「語学を学ぶ大学」という認識が先行し、その先の専門性やキャリアにつながる価値が見えにくいとの見方が示された。中には、「大学の難易度に対して、学びの中身や特徴の理解にギャップがあるため、進路指導上の説明が難しい」という指摘もみられた。

³ 国際理解の推進や交渉力、語学力を含む総合的な国際コミュニケーション能力の向上を目的として、参加者が各国の代表として国際問題を議論し、合意形成を図る教育活動。

⁴ 英米・第2部英米、ロシア、中国、イスパニアの4つの劇団が、それぞれの言語を用いて劇を上演。演目選びから、衣装、照明、音響効果、舞台装置、そして語劇ならではの日本語訳の字幕作成にいたるまで、全て学生が担当。

- ・また、上記要因として、私立大学や他の公立大学に比べて大学からの情報提供が限られており、「説明会や個別相談の機会が少ない」「神戸市外大から積極的な入試広報が届きにくい」「情報がないため、積極的に生徒へ紹介しづらい」という声が出ており、市内の高校現場との接点不足が課題として示された。
- ・教育内容面での個別意見としては、大阪大学外国語学部や京都産業大学外国語学部などと比較して専攻言語の選択肢が限られていることや、アジア・東南アジア系言語への関心が高まる中、現在の語学系学科の編成が「昔ながらの語学編成」にとどまっているとの指摘もあった。さらには、語学がツール化する中で、外国語そのものを学問として学ぶ形は、その多くがAIにとって代わられる可能性があり、特に英米学科では、純粋に英語を学問として学ぼうとする学生が今後減少していくのではないかとの問題提起もみられた。

(5) 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・市内高校との連携強化については、概ね各校共通して挙げられた。出前授業、大学説明会・見学会、高校の探究学習の支援、各高校のプログラムへの学生（留学生を含む）の派遣等を通じて、高校生が神戸市外大の魅力に触れる接点を増やすことが、進学動機の形成につながる可能性が示唆された。なお、このうち高校の探究学習の支援としては、進学動機の形成という観点のみならず、公立大学に期待する点としても複数の高校から意見がみられた。
- ・さらに、高大の交流にとどまらず、高校生が大学の授業を受講し、単位認定を受け、その実績が推薦入試で評価要素として加味されるような工夫があれば、実質的な高大連携も進みやすくなるとの指摘もみられた。
- ・語学が目的そのものではなくツール化している状況を踏まえて、より多くの高校生に訴求していくためには、語学力を基盤としながら、ビジネス・政策・地域課題などの分野にどう結びつくのかを可視化し、「語学＋専門分野」という学びの構造を明確に打ち出す必要があるのではないかと意見もあった。さらに、理系人材が重視される社会の中で、文系大学としてどのような価値を社会に提供できるのかを明確に示す必要があるとの指摘もみられた。
- ・学生ニーズを踏まえた魅力向上策としては、「国際性豊かなキャンパス環境の強化」「他大学との連携（単位互換など）による分野横断プログラムの充実」「地元企業等と連携した課題解決型の教育プログラム」「キャリア支援の充実」などの取組みについて、改善・強化が必要ではないかと指摘がみられた。そのほか、神戸市外大を訪れた際にキャンパス施設が古いという印象を受けた、キャンパス環境の改善も高校生に選ばれる重要な要素であるとの指摘がみられた。
- ・今後の神戸市外大のあり方として、他大学との統合の可能性の有無に触れた高校もあり、その背景として、特定の専攻以外の分野にも触れられ、文理問わず多様な学生との交流ができる点等から、高校生にとって総合大学には魅力があるとの見方も示された。

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果①

(A校：公立)

■ 要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・「専門性の高さ」、「複数の領域に触れられる」「将来の進路につながる見通しが立てやすい」「出願方式、受験科目が希望に合う」が挙げられる。
- ・進路指導の方針としては、まずは、大学で何を学びたいかを見定めたいうえで、学力レベルや大学の立地、家庭の事情なども考慮して考えさせるようにしている。
- ・探究学習では、1年生の段階からキャリアを意識して探究を進めており、将来どのような職業が存在するのか、自身がどのようなことに向いているのか、どのようなことに興味を持っているのかを意識させており、「将来の進路につながる見通しが立てやすい」という視点で専攻分野を選択する生徒も多い。
- ・グローバルな学びに関心のある生徒の中には、国際関係の分野に進む生徒が多いが、経済、経営、法学に興味を持って、その方向性で大学に進学する生徒もいる。
- ・校内での大学説明会も行っているが、生徒たちにはオープンキャンパスに積極的に行かせている。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・「他の大学にない独自のプログラム」に加え、大学では絶対留学に行きたいという生徒が多く、「留学等の機会やサポート制度が充実している」点も重視される。
- ・また、一定の英語力を有する生徒の中には、引き続き語学力のレベルを保てる、あるいはそれ以上の環境を希望する生徒もあり、英語で授業を履修できる環境は魅力となる。
- ・特に、最近では、外国語を語学として学ぶよりも、語学を使って様々な分野を学びたいという生徒が多いため、国際分野と関連する複数領域に触れられるということも重要視される。
- ・大学の知名度や、社会的評価にも影響を受ける。
- ・模擬国連を経験したい、あるいは、国際関係学科にいて、外交官や国際機関への就職を目指す生徒は、神戸市外大を希望する傾向にある。
- ・オールイングリッシュなどのカリキュラム面では、国際教養大学や上智大学、ICUなどは学内にいても英語を使う環境で学べるということが魅力に感じているようだ。最近では立命館大学など、ダブルディグリーのプログラムも用意されている大学も希望が多い印象である。
- ・一方で、留学がカリキュラム上必須になっているところもあるが、費用面で厳しいために、そういう大学を避けるという生徒もいるのは事実。
- ・既に英語学習に一定の経験を有する生徒の場合、大学では純粋に外国語を学びたいという希望、特に英語に関してそういう希望はあまりない。語学+αの学びを希望する傾向は強まっており、神戸市外大でも英米ではなく、国際関係学科や他の言語の学科の方が希望は多いように感じる。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

- ・グローバルな学びを志望する生徒にとって、特に関西圏では知名度が高いと考えているが、公立であるという点も大きいのではないかな。
- ・近畿では、国際関係を学びたい生徒が多いため、国際関係学科があるところは強みではないかな。
- ・高校生が神戸市外大の学びに触れる機会は、同大学への関心や志望形成につながる場合もある。
- ・語劇祭が本格的に実施されており、語劇祭に影響を受けて、神戸市外大に興味を持ったという生徒もいる。

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・留学制度に関しては、近年、各大学で充実が図られているため、突出しているという印象はない。
- ・生徒の希望が強い多文化、多国籍の学習環境（留学生数や外国人教員数）がどの程度あるのかは把握できておらず、あまりイメージはない。
- ・地下鉄の学園都市駅には近接しているが、地下鉄を利用する点で、通学負担が少ないとは言えない。学園都市への移転当時は、周囲に新しい大学が多くあったこともあり、非常に学園都市の活気があった。街自体が年数を重ねる中で、この立地条件の中でどう展開していくのかも課題の一つと感じる。
- ・英米が厳しくなってくるのではないかな、英米学科で、外国語を学問として学ぶことのほとんどはAI に取って代わられる。語学がツールになってきている中で、純粋に外国語を学問として学ぼうとする人の数が、特に英米については少なくなってくるのではないかな。これまでと違う学問の形を探っていくこともあるいは必要かもしれない。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・「国際性豊かなキャンパス強化」「分野横断プログラムの充実」は強化していくべきではないかな。「国際性豊かなキャンパス強化」については、留学生を増やすのは、神戸市外大だけでは難しいかもしれないが、キャンパスで国内留学しているような環境があるというのは高校生には魅力的である。「分野横断プログラムの充実」については、単位互換などの他大学との連携などの工夫も考えられる。
- ・「地元企業と連携した課題解決型の教育プログラムの充実」についても、高大連携したジョイントプログラムの展開も面白いのではないかなと感じる。
- ・キャンパス環境については、施設の老朽化に関する印象もあり、選ばれる大学であり続けるためには、改善も必要であると感じる。
- ・神戸市外大に関する情報を得る機会は一定程度あるものの、入試広報という観点では、大学側からの積極的な情報提供は限られている。

6. その他

- ・高大連携については、文科省が先取り履修を進めようとしている。実際には、高校側にも余裕がないことも要因ではあるが、高大連携が進んでおらず、高大交流程度にとどまっ

ているのが現状である。他の大学では、兵庫県立大学が開講する高大連携の授業を受講し、修了書をもらっていたことはある。立命館大学でも活発に行われており、高校では学ばない高いレベルの内容を大学の講義で先取り学習でき、協定校を対象に大学の単位として認定している。神戸市外大においても、高校生が大学の授業を受講でき、単位が認定され、それが推薦に少しでも有利に働くなどの工夫があれば、高大連携が進みやすくなるのではないか。

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果②

(B校：公立)

■要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・生徒に対しては、大学名ではなく大学で何を学びたいか、大学卒業後どのような職業に就きたいか、ということに重きを置いて大学を選択するように促している。明確に将来の進路について見通しが立てられている生徒においては専攻分野が決まっているが、高校在籍中には将来の進路が不明確である生徒においては、大学4年間で明確にしていくために幅広い視野に触れられる経済学部系・商学部系・法学部系に進む生徒が多く見受けられる。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・他の大学（語学系・国際系学部）には無い独自性のある教育プログラムや、多文化・多国籍の学習環境がある（留学生比率・外国人教員比率など）ことが重視される傾向にある。
- ・外部人材等と連携し、英語を用いたディベートやディスカッション、発表等を行う実践的な学習機会を設けている。その中で、難易度の高い内容についても英語を用いてやり取りする経験を積んでいることから、大学で語学そのものを学びたいというよりも、語学を活用して何を学ぶかを重視する傾向がある。語学を使う職業に就き、その先どのように活躍していくかを考慮すると、国際関係の学部を志望する生徒の方が多いように見受けられる。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

- ・小規模大学であるが故の行き届いた学びを受けられることが強みであると感じる。ひとつのゼミが10名以下で構成されており、教授との距離も近く、手厚いことが強みである。

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・特に「どのような内容が学べるのかが具体的にイメージしにくい」「卒業後どのような分野で活躍しているかイメージしにくい」という点は大きな課題である。
- ・「語学を学ぶ大学」という認識にとどまり、その先の専門性やキャリアにつながる価値が見えにくい点も課題である。大学からの情報提供が限られているため、高校側としても積極的に生徒へ紹介しづらい状況がある。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・模擬国連は魅力的だがかなりレベルが高いように感じる。高校生も参加できるような簡易版模擬国連を高大連携で実施できればありがたい。
- ・オープンキャンパスに限らず、学園祭等の地域住民が参加しやすい各種イベントを充実させることで、大学をより身近に感じられるようになるため、大学の認知度向上や志願者の増加も見込めると考えられる。

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果③
(C校：公立)

■ 要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・何が勉強したいのか、将来どのようなことがしたいのか、職業ではなく関わりたい分野を意識させるということを軸に進路指導をしている。
- ・「特定の分野の専門性の高さ・明確さ」「幅広い視野や複数領域に触れられる」で選んでいる傾向にある。現実的なことを言うと、「出願方式・受験科目が希望にあう」も関係がある。
- ・文系・理系の特徴では、理系は理学部なのか工学部なのか迷う生徒もいるが、ある程度、特定分野の志望の意思は強い傾向にある。文系に関しては、経済、経営を選択する生徒は、最近多いと感じる。外国語学で言うと、文学部なのか外国語学部なのかの境目は、総合大学の中で決めている傾向があると感じる。
- ・本来、外国語学部は、海外の文化や国際的な中での日本と海外の繋がりというところも含めて学ぶのではないかと思うが、生徒たちの中では、外国語学部は外国語を学ぶことを重点的にというイメージがあり、実際の学びが見えにくい。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・「海外留学の機会・サポート制度」「多文化・多国籍の学習環境」「国際分野と関連する複数領域を学べる」「将来の進路・キャリアにつながる見立てを立てやすい」といった点のニーズは高い。
- ・将来、グローバルに活躍したいという生徒もいるが、語学をツールとして捉える傾向が強まっており、必ずしも外国語、国際系の学部に進学するわけではなく、経営や司法の知識を身につけたいと志望する生徒もあり、学部系統の選択傾向は様々である。
- ・大学の志望理由書でも、希望する専攻分野とグローバルの関係が薄くても、「将来海外で活躍したい。そこに繋がるプログラムがあるから」といった記述も見られる。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

- ・教員の中では、他の大学にはない独自性として、模擬国連の話題が出た。
- ・その他、「海外留学の機会・サポート制度が充実している」「英語などで授業を履修できる環境がある」「多文化・多国籍の学習環境がある」という意見もあった。

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・「将来の進路・キャリアにつながる見通しが立てやすい」「大学の知名度」については、見えづらいと感じている。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・「国際性豊かなキャンパス環境の強化」「分野横断プログラムの充実」「キャリア支援の充実」といった点があがった。

- ・国際性豊かなキャンパス環境の強化に関しては、県立大学の国際商経学部では、留学生と寮で共同生活するような取り組みもあり、目立ちやすい。
- ・今後のあり方として統合という選択肢もあるのか。総合大学というのは、18歳の生徒たちからすると魅力がアップするのかなと感じる。大阪公立大学は、府市統合で非常に伸びている印象を受ける。特に、教養を森ノ宮キャンパスに集約したことは大きいと感じる。専攻分野以外の分野にも触れられることや、多様な価値観を持つ学生との交流、サークルの選択肢の多さなどの面で強みがある。外国語学部では、大阪大学の外国語学部を志望する生徒も一定数いる中で、大阪大学というネームバリューもあるとは思いますが、総合大学だから選ぶ生徒もいる。

6. その他

- ・高校の立場で大学に求めたいこととしては、生徒の探究活動に対して、大学生や院生にサポートをいただけたらというニーズは大きい。

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果④
(D校：私立、国際/グローバル特化コースなし)

■要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・所属コースによって、専攻分野を選択する際に重視する点異なる傾向が見られる。
- ・●●●コースの生徒は、特定分野における専門性の高さや学びの明確さを重視する傾向が強い。一方で、●●●コース及び●●●コースの生徒は、将来の進路が明確に定まっていなかったケースも多く、分野横断的な学びや幅広い選択肢を持てることを重視する傾向がある。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・グローバルな学びを求める生徒においては、大学選択の際に複数重視する点が存在するものの、最も重視される要素は海外留学や国際交流の機会およびその支援体制である。
- ・加えて、多文化環境（留学生や外国人教員の存在）や、学びが将来のキャリアにどのようなつながるかという点も重視される傾向にある。さらに、入試制度（選抜方式や必要科目）や難易度が自身の学力に適しているかどうかなども総合的に考慮されている。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

- ・立地面に関しても通学しやすい環境であることから、地元志向の生徒にとっては魅力的な要素となっている。
- ・加えて、「模擬国連」といった特色あるプログラムについては興味を示す声もあり、具体的な学びの機会として一定の関心を集めている。

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・特に「どのような内容が学べるのかが具体的にイメージしにくい」という点は大きな課題である。大学の難易度（偏差値）に対して、学びの中身や特徴が十分に理解されておらず、進路指導上も説明が難しい状況となっている。
- ・「語学を学ぶ大学」という認識にとどまり、その先の専門性やキャリアにつながる価値が見えにくい点も課題である。大学からの情報提供が限られているため、高校側としても積極的に生徒へ紹介しづらい状況がある。
- ・制度面では、休学留学した場合に5年在籍となることに対して、留年というネガティブな印象が強く、生徒・保護者ともに敬遠する要因となっている。また、理系生徒が受験しにくい入試制度や、高大連携の機会が少ない点も課題として挙げられている。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・「語学＋専門分野」という学びの構造を明確に打ち出す必要がある。具体的には、語学力を基盤としながら、ビジネス・政策・地域課題などの分野にどう結びつくのかを可視化することが求められる。
- ・高校との連携強化も重要な課題であり、出張授業、説明会、学生との交流機会など、接点

を増やすことが進学動機の形成につながると考えられる。さらに、理系生徒の取り込みを意識した入試制度の見直しや推薦入試の拡充も求められる。

6. その他

- 公立大学に対しては、「大学入学がゴールではない」という視点を踏まえ、卒業後の長期的なキャリアを見据えた教育が求められている。特に、社会全体で理系人材が重視される中、文系大学としてどのように社会に価値を提供できるのかを示す必要がある。
- 加えて、地元高校との継続的な関係構築を通じて、受験につながる導線を強化していくことが、公立大学としての重要な役割であると認識されている

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果⑤

(E校：私立、国際/グローバル特化コースあり)

■要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・理系の場合は、特定分野における専門性の高さと明確さを重視する傾向にある。自分が希望する将来の仕事や学びと、大学の学部学科があうように進路指導をしている。一方で、文系の場合は、複数の領域に触れられることを重視する傾向にある。明確に将来の進路が定まっていない生徒も多く、幅広い視野で学べるということも重要になる。
- ・出願方式や受験科目についても、特に2年生後半から3年生になると、現実的に自分の実力でどこまで手が届くかということも志望大学を決める要素になる。
- ・保護者の勧めというのもケースとしては多いように感じる。このランク以上を目指してほしいという希望もあるようだ。
- ・具体的な志望校は、学力に応じて決める傾向があるが、専攻分野は、キャリアデザイン教育を行っている中で、校内に大学の先生に来ていただいて説明会をしたり、関西圏の私立校を中心に、平日の大学訪問の受け入れをお願いして、体系立てて選択しやすい環境を整えている。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・国際/グローバル特化コースの生徒は、語学を学びたいという意向を持つ場合が多い。また、大学において、様々な国際的なかわりを持ちたいという希望も見られる。
- ・留学の意識が強い生徒が多いため、海外留学のサポート体制が整っているかどうかを最も重視する傾向にある。費用面のサポートもさることながら、1年留学しても4年で卒業できるかどうか大きな要素である。
- ・どの大学でも一部のトップ層に対しては、交換留学で留学先の学費を免除しているが、中間のボリュームゾーンの学生は、二重に学費が発生し、長期の留学が困難になる。経済的なサポートの充実や単位互換が可能などについて全面的にアピールしている大学は魅力的にうつるようだ。
- ・今の生徒は、語学を学ぶにしても、トリリンガルとか4言語を話せるようになりたいなどのモチベーションを持っている子が多い。単に語学を習得するのであれば、AI やオンライン英会話など、機会が多様化しているなかで、4年制大学に行くメリットとしては、国際的な体験ができるとか、 $+\alpha$ で何が学べるかというのはニーズが高まっていると感じる。 $+\alpha$ の内容は、生徒のモチベーションによっても異なるが、語学よりもうひとつ付加価値が必要になってきていると認識している。
- ・現実的には、入試の方式も大きな要素である。英語などの語学を学びたい生徒にとっては、科目数が多くなると負担を感じているようだ。一方、国公立志望で、6教科8科目を勉強している生徒は、選択肢が様々あるが、神戸市外大と同じような入試の方式が他の国公立大学では少ないので、神戸市外大を本命にすると、どこに併願しようかと考えると難しくなってくる。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・外国語や国際関係学を学ぶという際には、第1志望に上がってくるとは思うが、入試の難易度が高く、簡単にチャレンジできる大学ではないという認識
- ・個人的には模擬国連のイメージが強いが、生徒には馴染みが薄い。模擬国連に参加したという生徒は、1番に神戸市外大を志望すると思うが、高校生や高校の先生方に浸透していない印象。
- ・国連で働きたいとか、英語の先生になりたい、語学のスキルを磨きたいという希望をもった生徒にはとても合っている大学だと認識しているが、語学以上に何が学べるかという、情報があまりなく、見えづらい部分があるため、もう少し情報がもらえればありがたい。
- ・私立大学は、各校非常に経営努力をしており、高校現場の意見を聞きながら、大学の説明会も頻繁に実施し、時代に応じて入試制度の改革を進めている。一方、神戸市外大とは直接お話しできる機会がなく、大学の説明会の回数も限られているため、情報がないというのが実情。模擬国連などの魅力的な取組みがなされていても、認知度とすれば一部にとどまっている。もう少し高校現場に対して発信をしていけば認知度も高まり、志願者も増えるのではないかな。
- ・県立大学の無償化は大きい。市立の看護大学と県立大学の看護学部を比較すると、県立大学を志望する生徒が増えてきている。また、学校推薦型選抜などの制度面でも、県立大学を志望しやすい環境があると感じている。
- ・学科も、英米、ロシア、イスパニア、中国と、昔ながらの語学という編成になっている中で、現在は、アジアや東南アジアの言語がトレンドではないか。言語の多様性を考えたときに、大阪大学の外国語学部や京都産業大学、関西大学と比較すると学べる言語の数が少ない。志願率のデータをみると、ロシア学科や中国学科など、今の社会情勢において学生募集にもろさがあるのではないかと感じる。関西大学や近畿大学などの状況をみると、アジアの言語の選択肢が増えてもいいのではないかなと思う。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・市内の高校生が神戸市外大の魅力に触れる機会として、同大学の学生との交流などを充実させることは、生徒が様々な国の文化や言語に接し、同大学への関心を高めるうえで有意義であり、市内からの志願者増加にもつながるのではないかな。
- ・県立大学では、高校生との交流機会や説明機会の充実など、大学をあげた協力が行われており、そうした取組みが志望者の増加につながっているように感じる。また、入試課の先生から様々な情報を共有いただいたり、個別相談にも対応していただいたりしており、高校に対するサポートも充実してきていることは、我々教員にとってもありがたい。

【参考】市内の高等学校に対するインタビュー調査結果⑥

(F校：私立、国際/グローバル特化コースあり)

■要旨

1. 高校生が専攻分野を選択する際に重視する点

- ・生徒が進学先を選ぶ際に最も大きな影響を与えるのは、その大学や学部が有する特定分野における専門性の高さや、学びの内容の明確さであると考えられる。一方で、現実には、受験が近づくにつれて、最終的には学部の専門分野そのものに強くこだわらず、合格可能性や受験科目などを踏まえて進路を選択するケースも少なくない。
- ・また、受験科目を重視する生徒も多く、志望先の選定にあたっては、学びたい内容だけでなく、受験のしやすさも大きな要素となっている。
- ・高校でグローバル教育や国際系の学びに触れている生徒は、大学でも外国語・国際系の学部を志望する傾向が強く、あえて全く異なる分野へ進もうとする生徒は多くない。一方で、一部には「英語はもう十分学んだ」と感じ、大学では別の分野に関心を向ける生徒も見られる。
- ・外国語・国際系の大学を取り巻く環境は、特に新型コロナ以降、厳しさを増していると感じている。背景には、新型コロナの影響に加え、国が理系分野へのシフトを進めていることや、国内における国際化、いわゆる「内なる国際化」が進展し、日常的に外国人と接する機会が増えていることがある。その結果、外国語や国際性を強みとして海外に出ていくこと自体の差別化が、以前に比べて難しくなっているのではないかと感じる。

2. グローバルな学びを志望する生徒が大学選択で重視する点

- ・進学先の選択にあたっては、学びたい内容や国際系分野への関心も一定の影響を与えているが、最も大きな要素は、やはり本人の学力レベルに合っているかどうか、すなわち偏差値や合格可能性である。大学ごとの特色や施設、校舎の魅力、教育内容に惹かれる生徒もいるものの、実際には多くの大学で似たような学びができると受け止められており、最終的には偏差値や受験科目を踏まえて志望先を決めるケースが多い。
- ・神戸市外大は専門性が高く、グローバル分野や外国語に関心を持つ生徒にとっては、ぜひ目指したい大学の一つである。生徒の中には、これまでの国際的な経験や英語力を活かしたいという意欲を持ち、専門性の面では神戸市外大を志望するにふさわしい力を持っている者も少なくない。一方で、専門性や意欲だけで合格できるわけではなく、最終的には学力がどこまで伴うかが大きな課題となる。そのため、一般選抜で必要な総合力に不安がある場合には、総合型選抜や学校推薦型選抜も視野に入れながら、短期留学などの経験や英語力、国際分野への関心をどこまで具体的に示せるかが重要になる。

3. 神戸市外大の強みとして認識されている点

4. 神戸市外大の弱み・課題として認識されている点

- ・神戸市外大が生徒の進学先の選択肢に入る理由としては、まず、公立大学であること。そして、一定の学力水準を有していることが大きいと考えられる。教育内容そのものに強く惹かれて選ぶというよりも、偏差値、受験科目、学費面、また自宅から通える距離にある

ことなど、現実的な要素が志望理由として大きいのではないか。

- ・高校生に大学の魅力を伝える方法としては、教員による説明だけでなく、生徒自身が直接見たり聞いたりする機会が特に有効である。出前授業、大学見学、学校での説明会、総合的な探究の時間への参画などを通じて、大学の学びや雰囲気をも具体的に体感できる機会を設けることが重要である。実際に大学を見学したり、大学生から直接話を聞いたりすることで、初めて大学の魅力に気づく生徒も多い。
- ・特に、大学教員だけでなく、在学者や卒業生が高校に来て話をすることの効果は大きい。高校生にとっては、教員の説明以上に、年齢の近い大学生の生の声が身近に感じられ、「自分もこの大学に行ってみよう」というきっかけになりやすい。また、神戸市外大には留学生も多いと考えられるため、留学生や海外にいる学生とオンラインでつなぎ、現地で学びや留学経験を直接聞くような機会があれば、高校生にとって大きな刺激になるのではない。

5. 域内の高校生に選ばれ続けるために今後改善・強化すべき点

- ・留学制度や留学支援が充実していることが、大学選択における決定的な要因になるケースは、必ずしも多くない。中には「必ず留学に行きたい」という明確な意欲を持ち、留学制度を重視して大学を選ぶ生徒もいるが、全体としては限定的である。むしろ、留学が必須であることや費用負担が大きいことを理由に、志望先から外す生徒も見られる。
- ・大学選択においては、将来どのような仕事に就きたいかという具体的な職業イメージまで明確に持っている生徒は多くない。一定の希望を口にすることはあっても、それが進学先選択の明確な基準になっているとは限らない。実際には、大学のブランド力や知名度、偏差値、学費、受験科目などが大きな判断材料となっている。特に、公立大学であることは、学費面で大きな魅力となり得る。
- ・また、大学側はそれぞれ教育内容や特色を打ち出しているものの、高校生から見ると、大学間の学びの違いは必ずしも明確に伝わっていない。そのため、「この学問を学びたいからこの大学に行きたい」というよりも、京都大学、大阪大学、神戸大学、関関同立といった大学名やグループとしてのブランドで進路を選ぶ傾向が強い。